

若年性認知症とは

- 65歳未満で発症する認知症である。
- 全国に約38,000人の若年性認知症の人がいると言われている。
- 10万人あたりの有病率は47.6人である。
- 平均発症年齢は51.3歳である。
- 原因となる疾患はアルツハイマー病など、高齢者の認知症と違いはない。

※数字は2009年の調査

平成30年1月17日(水) @山口市民会館

名古屋市の若年性認知症支援の 取り組みについて

名古屋市社会福祉協議会
名古屋市認知症相談支援センター
若年性認知症相談支援担当
鬼頭 史樹

若年性認知症の特徴

- 現役世代に発症するため、経済的な課題が大きい。
- 診断がなかなかつかない、高齢者福祉と障害者福祉の“狭間”になってしまい、たらいまわしになってしまうことがある。
- 主介護者が配偶者に集中することが多い。
- 子どもが未成年である場合もあり、子育ての課題（養育、進学など）が重なることがある。
- 親世代の介護と重なるなど“ダブルケア”になる場合もある。
- 高齢者に比べ、高次脳機能障害（失行、失語など）が目立ちやすい。

名古屋市若年性認知症相談支援事業について

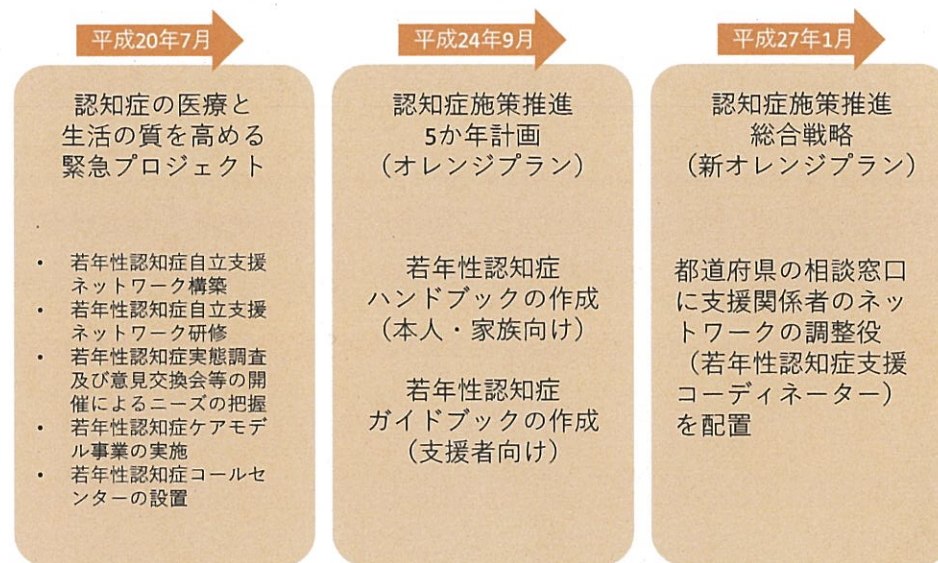
- ① 相談・個別支援
- ② 若年性認知症本人・家族交流会の運営
- ③ 若年性認知症支援ハンドブックの発行
- ④ 若年性認知症啓発講演会の開催
- ⑤ 若年性認知症相談職員向け研修の開催

- 特に本人・家族交流会の運営に力を入れており、当事者同士の出会いを大切にしている（ピアサポート）。
- 当事者同士が出会い、力をつけていくことで認知症とともに歩んでいくことができるよう支援をしている（エンパワメント）。
- 支援のノウハウを蓄積し、講演会や研修会、ハンドブック等を通して発信している。

名古屋市若年性認知症相談支援事業開始の経緯

時期	概要
平成24年4月	国の「認知症施策検討プロジェクトチーム」設置をうけて「名古屋市認知症連携体制強化事業」を開始（名古屋市社会福祉協議会に委託）し、連携担当者（のちの認知症地域支援推進員）を配置
平成24年8月	市内地域包括支援センターに認知症に関する聞き取り調査を実施調査のなかで若年性認知症に関し「社会資源がなく対応ができなかった」という声が複数聞かれた
平成25年2月	国の「認知症施策推進5か年計画」（オレンジプラン）策定および上記のような市内包括職員の声を受け、若年性認知症に関する事業の立ち上げと担当職員の配置を市に予算要求
平成25年7月	若年性認知症相談支援担当職員を配置
平成25年9月	認知症の人と家族の会愛知県支部が主催する若年性認知症サロン「元気かい」を視察し、場づくりのノウハウなどを学ぶ
平成25年10月	市の中核機関として「名古屋市認知症相談支援センター」を開設「若年性認知症相談支援事業」を本格的に開始
平成25年10月	若年性認知症ハンドブック「なごやの手帳」発行 若年性認知症本人・家族交流会を立ち上げ 若年性認知症啓発講演会開催

参考 | 国の若年性認知症施策の展開



平成28年度若年性認知症支援コーディネーター養成研修資料より引用 小長谷陽子作成図を改変

“居場所”が必要とされる背景

認知症施策推進総合戦略（新オレンジプラン）

資料1

～認知症高齢者等にやさしい地域づくりに向けて～の概要

- 高齢者の約4人に1人が認知症の人又はその予備群。高齢化の進展に伴い、認知症の人はさらに増加 2012(平成24)年 462万人(約7人に1人) ⇒(新) 2025(平成37)年 約700万人(約5人に1人)
- 認知症の人を単に支えられる側と考えるのではなく、認知症の人が認知症とともによりよく生きていくことができるような環境整備が必要。

新オレンジプランの基本的考え方

認知症の人の意思が尊重され、できる限り住み慣れた地域のよい環境で自分らしく暮らし続けることができる社会の実現を目指す。

- 厚生労働省が関係府省庁（内閣官房、内閣府、警察庁、金融庁、消費者庁、総務省、法務省、文部科学省、農林水産省、経済産業省、国土交通省）と共同して策定
- 新プランの対象期間は団塊の世代が75歳以上となる2025（平成37）年だが、数値目標は介護保険に合わせて2017（平成29）年度末等
- 策定に当たり認知症の人やその家族など様々な関係者から幅広く意見を聴取

七つの柱

- ① 認知症への理解を深めるための普及・啓発の推進
- ② 認知症の容態に応じた適時・適切な医療・介護等の提供
- ③ 若年性認知症施策の強化
- ④ 認知症の人の介護者への支援
- ⑤ 認知症の人を含む高齢者にやさしい地域づくりの推進
- ⑥ 認知症の予防法、診断法、治療法、リハビリテーションモデル、介護モデル等の研究開発及びその成果の普及の推進
- ⑦ 認知症の人やその家族の視点の重視

7. 認知症の人やその家族の視点の重視

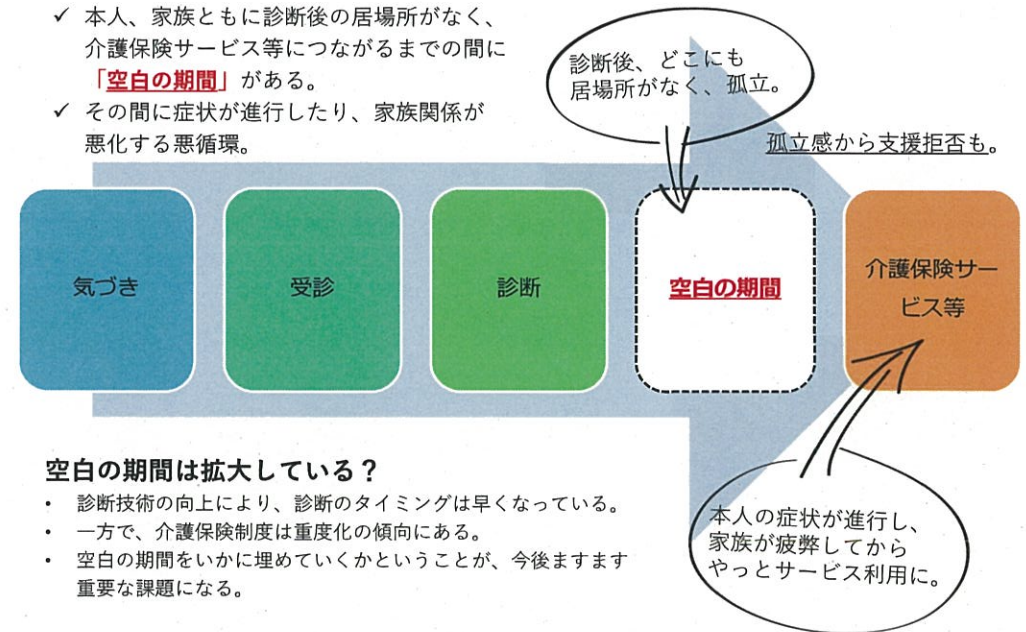
(2) 初期段階の認知症の人のニーズ把握や生きがい支援

○ 認知症の初期の段階では、診断を受けても必ずしもまだ介護が必要な状態ではなく、むしろ本人が求める今後の生活に係る様々なサポートが十分に受けられないとの声もある。早期診断・早期対応を実効あるものとするためにも、まずは認知症の人が住み慣れた地域のよい環境で自分らしく暮らし続けるために必要と感じていることについて実態調査を行う。

○ また、初期段階の認知症の人を単に支えられる側と考えるだけでなく、認知症とともによりよく生きていけるよう環境整備を行っていく観点からは、例えば認知症カフェで、認知症の人を単にお客さんとして捉えるだけでなく、希望する人にはその運営に参画してもらい、このような中で認知症の人同士の繋がりを築いて、カフェを超えた地域の中の更なる活動へと繋げていけるような、認知症の人の生きがいづくりを支援する取組を推進する。

【“空白の期間”について】

- ✓ 本人、家族ともに診断後の居場所がなく、介護保険サービス等につながるまでの間に「空白の期間」がある。
- ✓ その間に症状が進行したり、家族関係が悪化する悪循環。



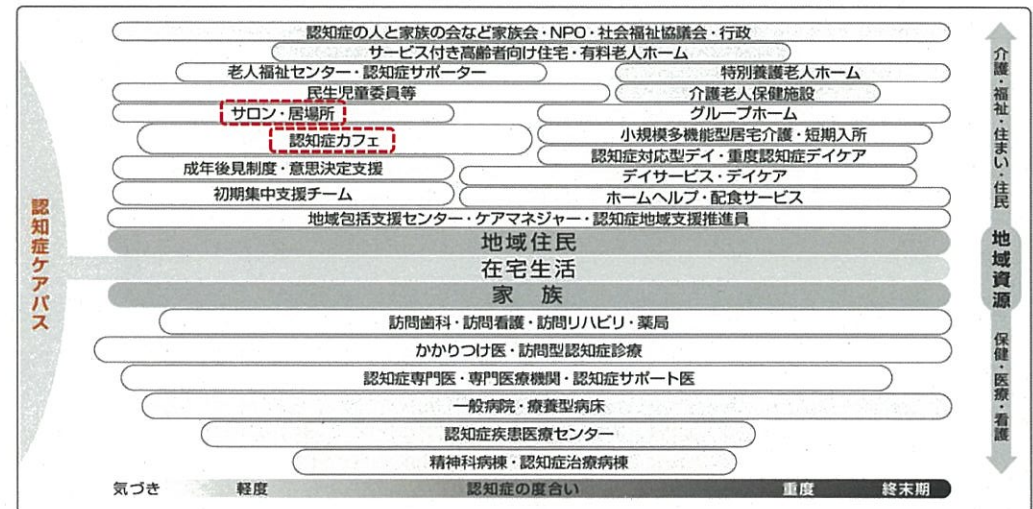
空白の期間は拡大している？

- ・ 診断技術の向上により、診断のタイミングは早くなっている。
- ・ 一方で、介護保険制度は重度化の傾向にある。
- ・ 空白の期間をいかに埋めていくかということが、今後ますます重要な課題になる。

空白の期間を埋める、

- ・ 認知症や社会資源についての正しい情報を得ることができる場
 - ・ 安心して自分の思いを出すことができ、認知症について話をするすることができる場
 - ・ 当事者同士が出会い、ともに認知症に向き合っていく仲間づくりができる場
 - ・ 地域・社会とつながり活動が広がる場
- が、必要！！

●京都市認知症ケアパス概念図（案）





集める場ではなく、
“集まる”場を！

丹野智文「笑顔で生きる」より抜粋

当事者が行きたいと思えるカフェが、いったいどれだけあるでしょうか？
カフェそのものが面白い、楽しい、落ち着く、そんな場所なら何度でも行きたいと思うはず。でも、どこにも私みたいなカフェに行ってみましたが、どこに行っても尋問されるのです。いつ病気になるのか？「病名はなに？」。なにに困っているのか？。これが行きたくなるカフェでしょうか？
居場所が面白くないから、家族も、当事者も行きたくないのです。
認知症カフェだからといって特別なことをするのはなく、普通の人が行って面白ければ、認知症の人にも面白いのです。

本人主体の場づくり 活動が広がるコーディネート

あゆみの会 | 名古屋市若年性認知症本人・家族交流会

- 平成25年10月に名古屋市若年性認知症相談支援事業の一環として開始した本人・家族交流会。
- 毎月第4土曜日に開催している定例会をはじめ、認知症カフェやサークル活動など、さまざまな活動を行っている。
- あゆみの会という名前は、「仲間とともに、いっぱい歩いていく」という思いをこめて、参加者みんなで作った。



- ✓ 仲間づくりの場、情報交換の場、社会とつながる場になっている。
- ✓ あゆみの会参加者の多くは、参加前には医療以外の社会資源につながってなかったが、参加後ほとんどの人が何らかの社会資源につながっている。
(※状況に応じて地域包括支援センターなどの関係機関と連携しながら個別支援を実施している)

あゆみの会の開催実績

	25年度実績 (10月開設)	26年度実績	27年度実績	28年度実績	29年度実績 (12月末)
開催回数	6回	11回	11回	11回	8回
延参加者数 (平均)	143人 (23.8人)	327人 (29.7人)	368人 (33.5人)	482人 (43.8人)	358人 (44.8人)
内訳					
本人	29人 (5.8人)	74人 (6.7人)	132人 (12人)	171人 (15.5人)	123人 (15.4人)
家族	54人 (9人)	130人 (11.8人)	138人 (12.5人)	162人 (14.7人)	111人 (13.9人)
サポーター パートナー	60人 (10人)	123人 (11.2人)	98人 (8.9人)	149人 (13.5人)	118人 (14.8人)

印象的なエピソード | 喫茶店のマスター Aさんの場合

- | | |
|-----------|--|
| 参加前の状況 | <ul style="list-style-type: none"> ・ 長年夫婦で喫茶店を営んできた Aさん（60代男性）。 ・ 当時、Aさんは店には立つものの、料理の仕方がわからず混乱。 ・ 妻にあたってしまい、妻もストレスからフラフラに。 |
| あゆみの会への参加 | <ul style="list-style-type: none"> ・ 地域包括からの紹介を受けて、25年10月のあゆみの会開設当初から参加。 ・ あゆみの会で楽しみながらいっしょに活動するなかで Aさんとの信頼関係ができ、Aさんと思いを共有できるように（不安な気持ち・家族や仕事への思いなど）。 |
| 区切りをつける | <ul style="list-style-type: none"> ・ 今後の店についての話し合いを行い、Aさんが自ら閉店を決めた。 ・ あゆみの会でおつかれさま会を行い、仲間たちの前で店主として閉店のあいさつをして、区切りをつけた。 |
| 役割と居場所 | <ul style="list-style-type: none"> ・ 閉店から数か月、以前に比べ少し元気のない Aさんを見て、あゆみの会の仲間から「カフェをやろう」という声があがった。 ・ 現在は、普段はデイサービスに通いながら、月に1回認知症カフェ「カフェといぼーどる」でマスターとしてコーヒーを淹れている。 ・ 「といぼーどるの日は自宅に帰ってから、しゃっきりしているの!」と奥さん。 |

あゆみの会オリジナルソング

- ・ Dシリーズ（全日本認知症ソフトボール大会）に参加した際に、他地域のグループがオリジナルソングを歌っていた。それを聴いて「**自分たちもオリジナルソングがほしい!**」と。
- ・ あゆみの会の学生パートナーとして参加した大学生に、ポップデュオ「たんポップばぶりか」として活動している学生がおり、「いっしょにつくってほしい」と依頼。
- ・ カフェといぼーどるや定例会で「**伝えたい言葉**」「**大切にしたい言葉**」を出し合った。
- ・ たんポップばぶりかのふたりが、その言葉をつなげて歌詞にして、曲をつけた。



講演会でお披露目

全国の当事者との交流



仙台の丹野智文さんと

当事者同士のネットワークの広がり

- ・ 意見交換会や講演会などの機会を通じて、全国の当事者とのつながりづくりをコーディネートしている。
- ・ 27年11月には宇治市にて、**宇治×名古屋の当事者交流会**を開催。（参加者は総勢40名以上）
- ・ 全国の仲間の影響で、**前向きな気持ち**になったり、「**認知症の人にやさしいわがまち**」という目標を共有するきっかけになっている。
- ・ ネットワークの広がりが、市民向け啓発講演会や専門職向けの研修会などで、当事者自身が体験や思いを発信していくアクションにつながっている。



宇治市平等院鳳凰堂にて 宇治市当事者チームのみなさんと

“仲間”と出会った当事者の声

- ・ 同じ病気を持っている仲間の話を聞くことができ、**勇気づけられた。**
- ・ **思いをわかってくれる人と出会えた。**
- ・ やめてしまった趣味をまたやってみようと思った。
- ・ がんばっている仲間を見て、**自分もがんばりたい**と思った。発信していきたいと思った。

AYUMI—いつもいっしょだよ—

たんポップばぶりかwithあゆみの会

いつも元気だねって よく言われるけど
そんなことないよ がんばってきたんだ

涙をふいて さあ 顔をあげよう

君もいる 僕もいる みんないる
ひとりじゃないよ
輪になって 手をつなごう
ともに あゆみ続けよう

明るい明日に なるように
楽しい自分で あるために

今をこの瞬間（とき）を 大切にしよう

君もいる 僕もいる みんないる
ひとりじゃないよ
輪になって 手をつなごう
ともに あゆみ続けよう

あゆみ続けよう

個々の活動も活発に



漫才で認知症啓発
(よつば義人さん)



シニアファッションショー
出演 (稲垣豊・一子夫妻)



夫婦で講演活動

当事者キャラバン・メイト



名古屋市で初の
当事者キャラバン・メイトに
(山田真由美さん)

母校で後輩たちに
認知症サポーター養成講座



実際のアンケート用紙 10代女性 (高校生)

1 認知症について理解できましたか。

<input checked="" type="checkbox"/> よく理解できた	<input type="checkbox"/> まあまあ理解できた	<input type="checkbox"/> どちらともいえない	<input type="checkbox"/> あまり理解できなかった	<input type="checkbox"/> ほとんど理解できなかった
---	------------------------------------	------------------------------------	--------------------------------------	---------------------------------------

理由
人それぞれ症状が違うということや、どんなことに困っているかということがよくわかったから。

2 認知症サポーターの役割について理解できましたか

<input checked="" type="checkbox"/> よく理解できた	<input type="checkbox"/> まあまあ理解できた	<input type="checkbox"/> どちらともいえない	<input type="checkbox"/> あまり理解できなかった	<input type="checkbox"/> ほとんど理解できなかった
---	------------------------------------	------------------------------------	--------------------------------------	---------------------------------------

理由
どんな役割が重要で、どのようなことが出来るのかも知ることができたから。

3 今後、地域において、認知症の方やその家族に対してどのような働きかけができるでしょうか。

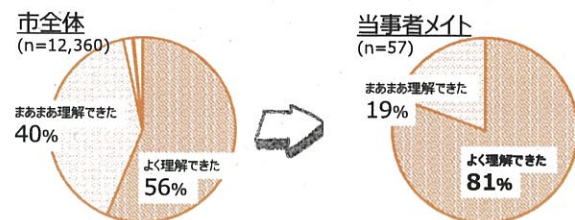
袋詰めなどで苦勞している人がいたら声をかけたり、さりげなく助けたい。

4 その他、感想など自由にお書き下さい。

認知症の知識を増やすことができた。これから自分がどのような働きかけができるかを考えることができた。すく良い時間だった。

サポーター養成講座受講後アンケートの比較

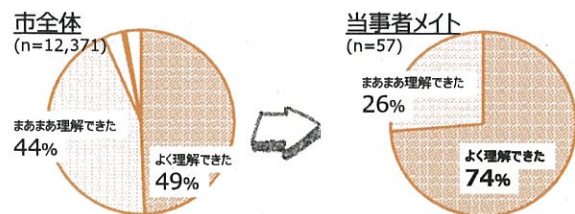
質問1 認知症について理解できましたか



調査

当事者メイトを中心としたサポーター養成講座の受講後アンケートの結果（平成28年10月～平成29年1月の計3回）を、市内のサポーター養成講座受講後アンケート結果（平成27年度市全体）と比較した。

質問2 認知症サポーターの役割について理解できましたか



結果

「認知症について理解できましたか」「認知症サポーターの役割について理解できましたか」の質問項目において「よく理解できた」と答えた人の割合が多くなった。また、自由記述欄にも「当事者の生の声をきくことでより理解が深まった」「認知症の症状が記憶障害だけでなく、いろいろな症状があることがわかった」「具体的なサポートの仕方がわかった」といった記述が多くあった。

結婚式場でのサポーター養成講座

息子さんの結婚式に向けて、結婚式場スタッフに認知症サポーター養成講座を開催



認知症が原因で結婚式の出席に不安を持っているのは、山田さんだけじゃないはず。式場スタッフにとっても認知症は自分ごと。

あこがれだった留袖を着ることができた

安心して結婚式に出席することができた

母親としての役割を果たすことができた



NHKのドキュメンタリー番組に

当事者が当事者の相談に対応する 相談窓口「おれんじドア」



平成29年5月
西区認知症専門部会委員に就任
(市内初の当事者委員)



平成29年6月
おれんじドアも～やっこなごやを
開始



「孤立緩和や自信取り戻す」

【あゆみの会の活動の広がり】

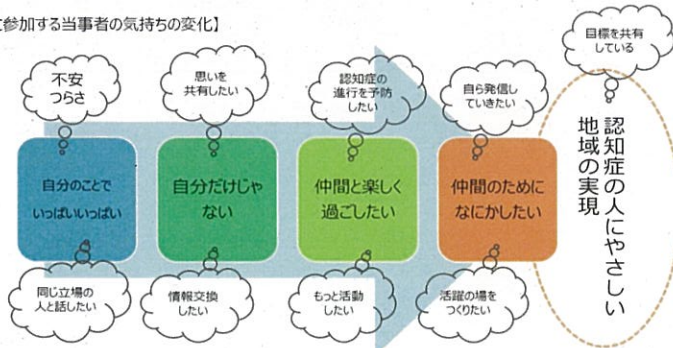


新オレンジプランの実現！

当事者同士の出会いがもたらす活動の広がり

- 交流会での当事者同士の“出会い”は、当事者が仲間とともに認知症に向き合い、エンパワメントし合う効果を持つ。
- 活動の幅が広がり、さらに多くの当事者同士が会おう中で、そのパワーは増幅し、ネットワークが生まれ、地域や社会に向けてのアクションにつながっていく。
- 今後当事者同士の交流会や認知症カフェに期待される効果としては、“出会いの場”であることと同時に、このような活動の広がりを支える“活動拠点”になっていくことである。

【交流会に参加する当事者の気持ちの変化】



安心を生む関係性 活動が広がるかわり

認知症の人の“不安”

認知症の中核症状

- 記憶障害
- 見当識障害



“安心”を生む関係性とは

ヒントになったこと

- 記憶は薄れても、**強い感情**は残る。
- 見当識障害は、時間⇒場所⇒人物の順で出現する。
(人物の見当識は比較的保たれやすい)

記憶ではなく、“感情”“見当識”に
食い込む関係性

ということは…

- ✓ 時間や場所があやふやでも、“**知っている人**”がいれば安心できる。
- ✓ 「こいつのことは知っている」「こいつといると**楽しい**」が安心につながる！
- ✓ 「**やりたい**」がエネルギーになる！

- 認知症の人にとっては「**人的環境**」こそが最大の環境因子
- 強烈な感情が起動するかかわり
⇒**爆笑、共感（仲間）、やりたいことの実現、社会的役割**



- ✓ あゆみの会に来て、友だちが増えた
- ✓ 「ひとりじゃない」と思えた



- ✓ 支えられるばかりでない
- ✓ 支え合う関係

あゆみの会パートナー

- あゆみの会パートナーは、あゆみの会の目的を理解し、ともに歩みたいと思う専門職や学生などのボランティアである。
- メンバー（本人・家族）とパートナーは仲間・友人であり、対等な関係である。※お互いが安心して自分を出せる関係性。
- メンバーと目的・目標を共有し、お互いにサポートしあいながらいっしょに活動する。
- メンバーのエンパワメント・自己決定をうながす。
※情報提供を行うが、メンバーが自ら情報を選択し、自己決定し、周囲の人に伝えることができるようになる。
- メンバーの声やあゆみの会の活動を、地域や社会にフィードバックすることで、“認知症の人にやさしい地域・社会”の実現をめざす。

あゆみの会の活動はメンバーの思いと、それをいっしょに実現するパートナーの存在によって成り立っている！

あゆみの会のバス旅行

- あゆみの会では年に2～3回のバス旅行を行っている。
- **「認知症になって好きだった旅行に行く機会が減った」という声がたくさんあがった。**
- 名古屋市の「福祉バス」という制度を利用している。
- 毎回バス旅行の企画・アテンドは当事者（多くは夫妻で）が務める。
- **「行きたい」を実現するとともに、企画者としての役割がある。**

「やりたい」を実現する



- ✓ 認知症になったからといって、やりたいことをあきらめたくない

バス旅行参加者の声

- 通常のバス旅行では、時間に追われているように感じ、参加しづらい。
- あゆみの会のバス旅行では、**みんながわかってくれていて、待っていてくれる。**
- のんびり楽しめる。
- 夫婦ふたりでは行けなかった温泉に行けた！
- **みんなで行けばなんとかなる！**

認知症カフェをベースにした “本人ミーティング”の開催



本人ミーティングとは

- 認知症の本人が集い、本人同士が主になって、自らの体験や希望、必要としていることを語り合い、自分たちのこれからのよりよい暮らし、暮らしやすい地域のあり方を一緒に話し合う場です。
- 『集って楽しい!』に加えて、本人だからこそその気づきや意見を本人同士で語り合い、それらを地域に伝えていくための集まりです。



本人ミーティング開催ガイドブックより抜粋

施策の着実な実行に向けて関係省庁連絡会議で共有する主な取組

○地域で認知症に関わる事が多い業界への理解推進、認知症サポーターが活躍している取組の普及・推進

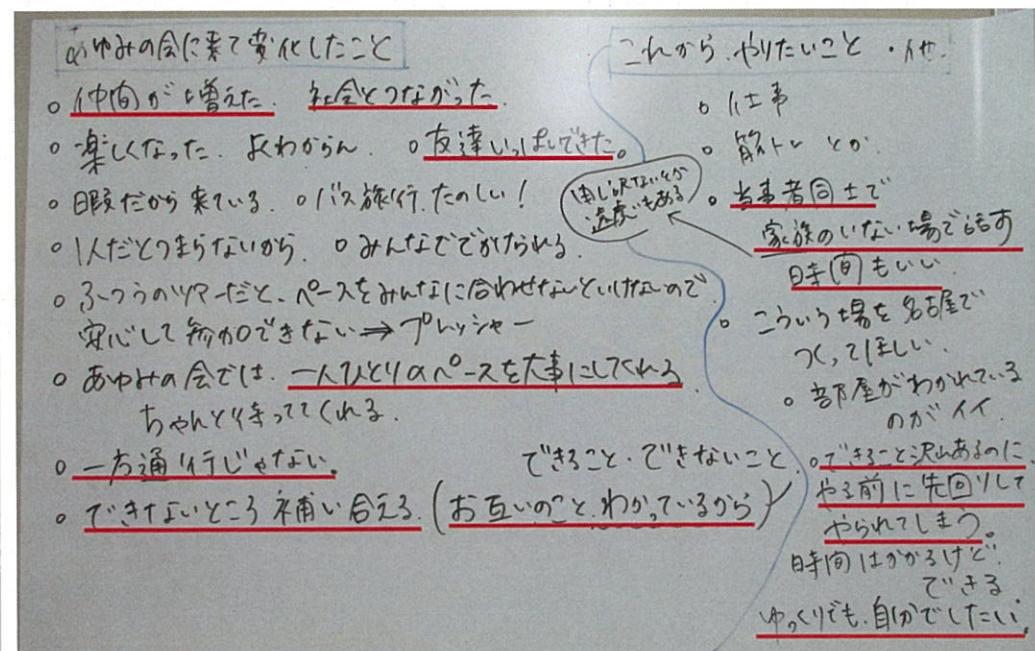
- 小売業・金融機関・公共交通機関の職員に認知症の理解を深めてもらうため、認知症サポーターについて、周知し、受講を勧めることにより、認知症に気づき、関係機関への速やかな連絡等、連携できる体制整備を進める。
- 認知症サポーター養成講座の際に認知症サポーターが地域でできる活動事例等を紹介する。

○認知症の人本人による発信の共有、本人ミーティングの推進

- 関係省庁連絡会議等幅広い機会において、認知症の人本人による講演・意見交換の場を設ける。
- 認知症の人やその家族の視点を重視した支援体制の構築のため、地域で認知症の人が集い、発信する取組である、本人ミーティング等について全国的に広める。

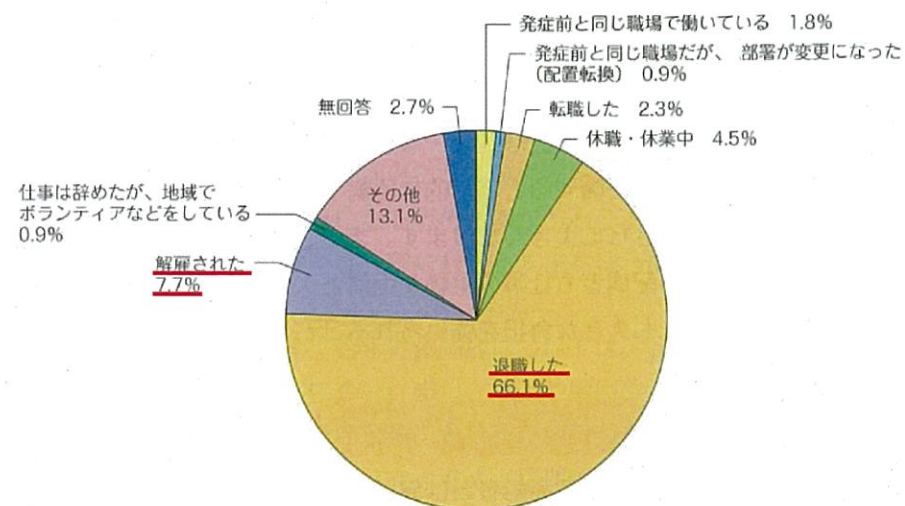
○成年後見制度利用促進基本計画に基づく施策の着実な推進

- 全国どの地域においても必要な人が成年後見制度を利用できるよう、各地域において、権利擁護支援の地域連携ネットワークの構築を段階的・計画的に図る。
- 本人の特性に応じた意思決定支援を行うための指針の策定等に向けた検討や検討の成果の共有・活用を行う。



若年性認知症の人への 就労支援について

若年性認知症の人の就労についての現状



資料：平成26年度老人保健健康増進等事業「若年性認知症者の生活実態及び効果的な支援に関する調査研究事業報告書」

なぜ“就労支援”が必要なのか①

- Bさんはサラリーマンしていたが、認知症と診断後に仕事を解雇された。
- 退職後数年経ってから、深夜に「仕事に行く」と言って準備をしはじめたり、昔の同僚に仕事の電話をかけたりといったことができた。
- 妻がそれを止めようとするとう怒ってしまうこともあった。

なぜ“就労支援”が必要なのか②

- 若年性認知症の人にとって、仕事は**経済的基盤**という面はもちろん、**社会とのつながり、生きがい**という面もある。
- 仕事を辞めざるをえなくなったときに、そのことを受け止めることができない、納得できていなかったりすると、
- 後々認知症が進行した時に、**本人自身や家族を苦しめてしまう**ことになってしまう。

なぜ“就労支援”が必要なのか③

- 就労を継続したり、再就職を目指すこと（狭義の就労支援）だけが目的ではない。
- 認知症の進行の中で「できないことが増えていく自分」に向き合い、受け止めていくこと、今後の生活の準備をしていくことが大切。
- 福祉的就労や社会参加支援を含めた“広義の就労支援”が必要とされている。
- そのために本人・家族を中心に、会社や関係機関が連携し、伴走型のチーム支援を展開していく必要がある。

事例⑦ | 職場での支援

【50代のMさん(男性)、会社員】

Mさんは、電気関係のエンジニアとして働いていましたが、仕事上でパソコンの操作がわからなくなるといったことがあり、会社から受診をすすめられました。受診の結果、アルツハイマー型認知症と診断されました。

診断後、会社の上司や同僚と相談し、部署異動や仕事内容の変更などを行いました。同僚のサポート体制もありましたが、どのようにサポートをすれば効果的なのか悩みもありました。そこで、Mさん、ご家族、会社の上司と同僚、愛知障害者職業センター(17ページ)、いきいき支援センターと名古屋市認知症相談支援センターで会議を開催し、今後のMさんのサポート体制について意見交換を行いました。

会議後、職業センターの職業カウンセラーによる能力評価を経てジョブコーチ支援を開始しました。能力評価によってMさんの苦手になっていることとできることが明確になり、ジョブコーチからパソコン入力の工夫の仕方や同僚のサポートの仕方を助言する支援を行いました。

*プライバシー保護のため、内容は変更しています。

名古屋市若年性認知症ハンドブック「なごやの手帳」より引用

ポイント①

ポイント②

Mさんの就労継続の支援 ポイント①

経緯

- 電気関係の企業でエンジニアとして働いていたMさん。
- 仕事上のミスが多くなったことで、会社側が受診をすすめた。
- アルツハイマー型認知症と診断され、通院開始。
- 会社側も診断を受けて、配置転換などで対応していた。
- しかし、サポートする同僚の負担が大きくなり、地域包括支援センターに相談が入った。

本人・家族の希望

- 子どものこともある。できるだけ仕事を継続したい。
- ミスは多いが、まだできる仕事がある。単純な作業をしたい。

会社側の希望

- 本人には長年会社のためにがんばってきてもらっている。何とか仕事を継続してもらいたい。
- しかし、本人にどのような業務ができるのか、いろいろ検討はしているつもりだが、わからない。
- サポートする同僚の負担が大きい。サポートのコツのようなものがあれば知りたい。

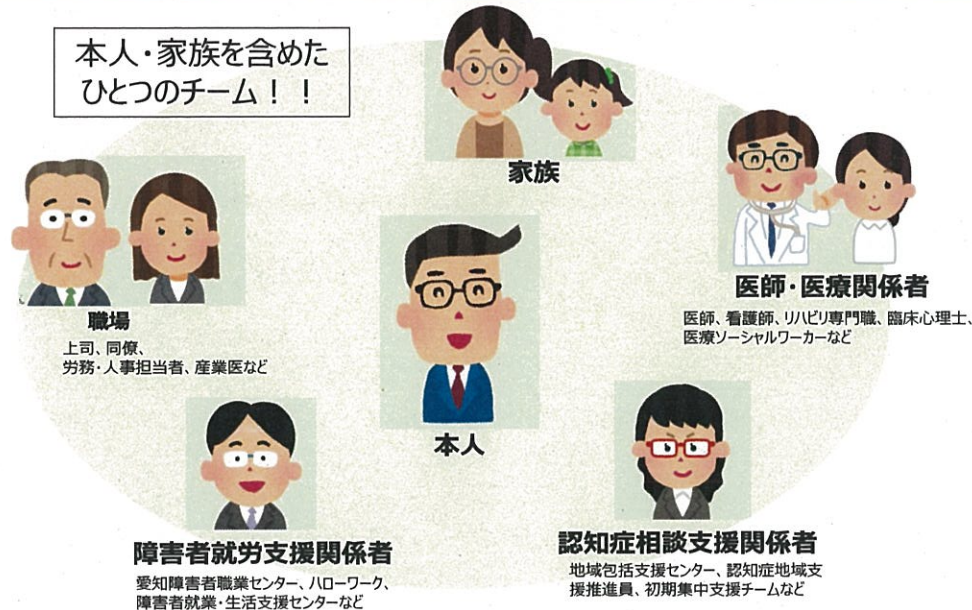
Mさんの就労継続の支援 ポイント②

支援会議（初回）の出席者と内容

立場	出席者	報告事項・確認事項等
当事者	本人、家族	<ul style="list-style-type: none"> • 現在の業務内容について • 今後望む業務内容について（単純な作業） • 業務内容の変更、配置転換などの会社側の今後の対応について • 支援機関の支援内容について
会社	本人の上司（部長、課長）、同僚、人事部長	<ul style="list-style-type: none"> • 現在の本人の業務内容と部署内の業務について • 同僚によるサポートの内容と負担について • 支援機関の支援内容について
障害者就労支援機関	愛知障害者職業センター職員（職業カウンセラー、ジョブコーチ）	<ul style="list-style-type: none"> • 障害者就労支援機関の役割について • 考えられる支援内容について • 支援開始後の流れについて
認知症相談支援機関	地域包括支援センター職員（認知症地域支援推進員）、認知症相談支援センター職員	<ul style="list-style-type: none"> • 相談支援機関の役割について • 医療機関による評価、医師の意見もふまえて、認知症の障害特性について • 考えられる支援内容について • 生活面の支援について

➡ 支援会議の開催はチーム支援体制構築の第一歩！

若年性認知症の人の就労継続を支える人々



Mさんのその後① | 継続支援～退職

- 障害者職業センターによる職業相談・評価を経て2か月のジョブコーチ支援を開始。
- ジョブコーチによる環境整備や業務上の工夫についての助言、本人の努力、同僚のサポートにより、パソコン入力能力の向上が見られた。
- しかし、ジョブコーチ支援終了時点で会社が求める継続的な業務の水準にまでは至らなかった。
- 再度会議を開催し、会社側から退職についての提案があり、本人・家族も承諾し、退職となった。
- 退職時には、会社側から独自の退職金制度の提案があり経済的支援を受けることができた。

Mさんのその後② | 退職～求職活動

- 退職後、本人の「仕事をしたい」という思いを聞きとり。失業給付を受給しつつ、本人・家族、障害者職業センター、障害者就労等の相談支援機関、ハローワーク、認知症相談支援センターのチームで求職活動支援を開始。（月に1回、活動を報告するミーティングを開催）
- その後、求職活動中の本人の活動場所として介護保険のデイサービスが加わり、就労に向けた作業訓練を開始。
- 約1年の求職活動を行ったが、再就職には至らず、求職活動支援は終了（失業給付受給も終了）。現在は障害年金を受給しながら、デイサービスで有償ボランティアを行っている。

Mさんの支援で見たポイント

- 専門機関による客観的評価と本人の努力、会社側のサポート努力の可視化により、退職という結論について、本人・家族を含む関係者の納得が得られた。また会社から経済的支援を受けることができた。（**チーム支援**）
- 退職後もチーム支援を継続し、本人の求職活動を支えた（**伴走型支援**）。
- 求職活動では、再就職という目標は達せられなかったが、本人が「行きたい」と思える場所が地域で見つかった（**ソフトランディング**）。また、その過程をチームで支えることができた。

まとめ | 若年性認知症の人の就労支援に必要なこと

- 就労支援は本人の障害受容と、職場の同僚など周囲の理解なしには成立しない。**認知症についての情報提供が大切。**
- 本人、家族、職場、医療機関、相談支援機関などが連携する“**チーム支援**”が必要である。
- 制度の“狭間”にあることを理解し、**既存の枠組みにとらわれない柔軟な支援**を展開する。
- 認知症は進行することを理解する。目標設定と支援の経過を随時関係者間で共有する。
- 就労を継続することが困難になるタイミングは必ず来る。それは認知症の特性であり、“支援の失敗”ではないことを理解する。
- 中長期的な視点を持ってタイミングを見極め、地域に**ソフトランディング**していく準備をしていくことを支える“**伴走型の支援**”が必要である。

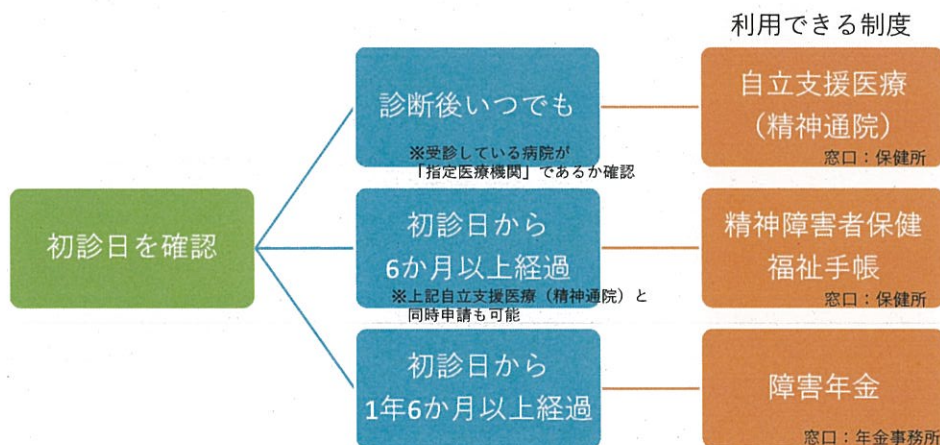
若年性認知症にかかわる経済的支援制度

- ✓ 自立支援医療（精神通院）
- ✓ 精神障害者保健福祉手帳
- ✓ 傷病手当金（健康保険）
- ✓ 失業給付（雇用保険）
- ✓ 障害基礎年金・障害厚生年金

これだけは知っておきたい！

- 若年性認知症の支援において、経済的な支援は非常に重要。
- 上記5つの制度は中でも重要な制度になるので、これらの制度の利用がない場合には利用をすすめる。
- ただし、申請等に要件がある場合もあるため、概要を説明するとともに、**必ず窓口も案内する**（たらいまわしにならないように）。

初診日から考える「利用できる制度」



初診日とは、原因となった傷病について初めて医師の診療を受けた日です。
※診断を受けた日ではないことに注意

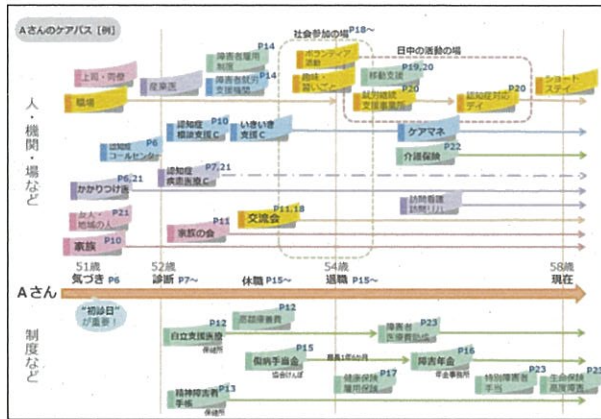
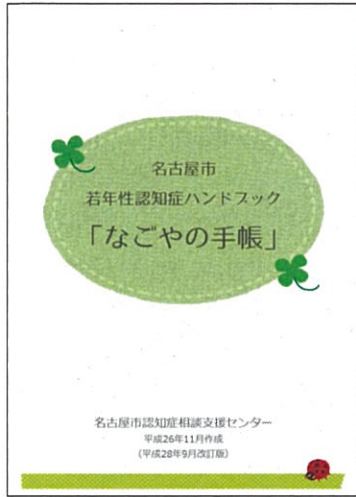
休職中や退職後の社会参加支援・活動支援について

- ✓ 若年性認知症本人・家族交流会
- ✓ 認知症カフェ
- ✓ 趣味活動やボランティア活動、アルバイト
- ✓ 就労継続支援B型事業所
- ✓ デイサービス（介護保険） など

“空白の期間”はできるだけ少なく！

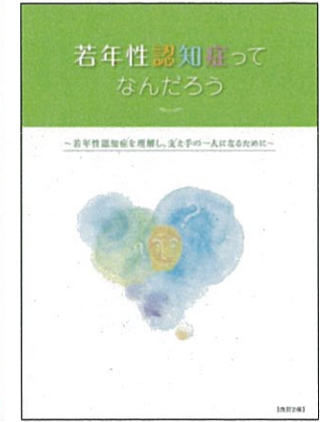
- 休職中・退職後には社会とのつながりを失い、引きこもりがちになってしまう人が多い。これを“空白の期間”と呼ぶ。
- 空白の期間が長引くと、認知症状の進行、行動・心理症状（BPSD）の出現、家族との関係悪化などがおこる。
- 最低月に1回、定期的に出かけられる“なじみの場所”をつくれるように支援する。

名古屋市若年性認知症ハンドブック 「なごやの手帳」



「なごや認知症あんしんナビ」HP
(<http://n-renkei.jp>) よりダウンロードできます。

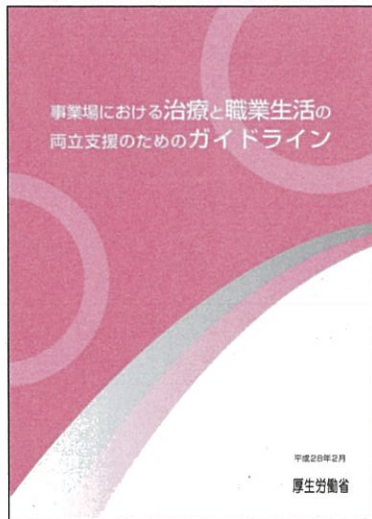
参考になる資料の紹介①



『若年性認知症ハンドブック』 『若年性認知症支援ガイドブック』 『若年性認知症ってなんだろう』

いずれも「若年性認知症コールセンター」のHP (<http://y-ninchisyotel.net>) よりダウンロードできます。

参考になる資料の紹介②



「事業場における治療と職業生活の
両立支援のためのガイドライン」

厚生労働省HP
<http://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/0000115267.html>

事業所と主治医をつなげる際に使用
できる様式などが入っており、
参考になる。

参考になる書籍の紹介



丹野智文 (2017) 『丹野智文 笑顔で生きる』文藝春秋。



大城勝史 (2017) 『認知症の私は「記憶より記録」』沖縄タイムス社。